各論 5

子どもの願いを大切にして

～5歳児12期の野菜にかかわる生活の中で～

5歳児　つき組　担任　星　野　和　美

はじめに

担任として、子どもたちひとりひとりが、自分を素直に表わしまたいろいろな人の気持を受けとめながら、期にふさわしい充実した生活を送ってほしいと願ってきた。

11期（5歳児4月～5月）のつき組の子どもたちは、年中組2クラスを再編成した年長組2クラスの一方であることもあり、年長組になってはりきった気持を表わす一方、新しいクラスに親しめず自分を出し切れずにいるように思える姿もあり、担任としてまずひとりひとりの子どもとの気持のつながりをもつことに努めていった。また、年中組からのなかよしの友だちをよりどころとしている姿が多くみられ、それを自然なことと受けとめながらも、徐々に新しい友達への親しみを広げてほしいという願いをもって保育にあたってきた。

12期（5歳児6月～7月)、徐々に新しい担任や新しい友達に親しみ、子どもたちの生活は落ち着いてきたように思えた。しかし、周囲の大人に見守られたり認められたりすることでより意欲的に活動する傾向があるが、自分であるいは友だちと誘い合って、願いやめあてをもって活動を続けるという姿がやや少ないのではないだろうかという課題を感じた。

ここでは、この12期に、自分たちが苗を植え生長を見守ってきた野菜が実りを迎えたことで、子どもたちがさまざまな思いをもって生活してきた様子を振り返り、子どもたちはどのように自分の願いを表わしてきたか、そして保育者はそれをどのように支えてきたか等を考察し、「期にふさわしい生活」を求めていく手だてのひとつとしたい。

Ⅰ　保育の実践記録

以下の記録は、5歳児つき組(33人)の12期の記録のうち、自分たちが育てている野菜にかかわるものを中心としたもの。

※特に活動場面について説明していないものは、「自分でみつけた遊び」の中での姿

※記録中、Tは担任を示す。

1、園庭の花壇で、年長組が野菜の栽培をしようとしたわけ

春咲きの花も終わりに近づいた5月上旬の教官会議で、園庭の花壇を今年度はどのようにしようかという話し合いをもった。

園舎南側の園庭にある3つの花壇は、例年、年少組・年中組・年長組に割当て、その

年ごとに考えて、子ども達の生活にふさわしい栽培活動を行うようにしてきている。年長組担任２人は、今年度は野菜の栽培をしてみようと思っていることを提案して、他の教官に相談にのってもらった。次のような内容であった。

① 数年前、O―157事件について全国的な報道があった。本園および周辺の校園は全く無関係であったが、やはり警戒して、それまで年により実践していた、野菜を栽培して園でみんなで一緒に食べるという活動から遠ざかっていた。しかし、やはり、子ども達に、自分たちが食べる野菜がお店にただ売れているものではなく、自然の中で育ち実っていくものということを実感できる環境をつくりたい。

② 子どもたちの手で栽培しやすく実っていく様子もよく分かる野菜として、この季節にはトマト・きゅうりなどが考えられる。しかし、実際の実りが、子ども達が登園しない夏休み中になる可能性もある。できるだけ早く苗を植えるが、もし１学期の内に実らなくても、初夏の季節の中でみずみずしく育つ野菜の生命力を身近に感じる経験としたい。

③ 園庭には十分な広さの畑はない。広い畑で栽培できればその上はないが、離れた場所に広い畑を借りるより、狭くても日々の生活の中で野菜の生長を感じることのできる、園庭の花壇を用いる。

ただし、３つの花壇の内、例年は年中組が栽培活動をしている園庭中央の日当たりのよい花壇を、今年度は年長組の野菜の栽培活動にあて、幼稚園のみんなでその生長を見ていくように位置づける。

このような担任の願いや考えをもって、５月20日（土）、年長組２クラスで、野菜の苗（ミニトマト・きゅうり・トウモロコシ、各10本ずつ）を、園庭中央の花壇（さほど広くはないが、以後「野菜畑」と表記）に植える。この日以降、水やりの世話をしながら、子どもたちといっしょに野菜が生長していく様子を見守っていった。

2、大きくなった１本のきゅうりが子どもたちの気持をゆさぶる

小さな「野菜畑」であるが、植えた苗は順調に生長し、まずきゅうりが少しずつ実ってきた。

実ったきゅうりをどのようにするか子ども達と共に考えていこうと思っていたので、かなり大きくなったものもあったが、担任２人はあえてそのままにしていた。

6月15日（木）

ひでき、「野菜畑」でひとりできゅうりに水やりをしている。

T、ひできのそばに行く。

ひでき、「大きくなった。食べれるの？　ばくはつしそう。」と、１本のきゅうりがとても大きくなっていることに驚きを感じている様子で、Tに話す。

（きゅうりというより「うり」の太さになっている）

しばらく後、やはりひとりで『野菜畑』に来ていたあんり、近くにきたTを呼び止め、きゅうりが実っていることを知らせる。

あんり「たんぽぽさんと一緒に食べるの、いつ？」と、Tにきく。

近くにいたさやかも「ほしさんと一緒に食べたい」と言う。

（たんぽぽ組：年中組、ほし組：年長組、）

あんりは、たんぽぽ組のかずとしと家が近所であり園でもよく一緒遊んでいる。そのせいか、自分たちが育てた野菜を、たんぽぽ組の子どもたちと一緒に食べたいと、自然に願いをもったようだ。

この時点で、Tは、１本のきゅうりを前にして、他クラスの子どもたちと一緒に食べようというイメージはわかず、あんりの質問に「そうだねえ…」と聞くにとどまっている。

6月16日（金）

登園後すぐ、たかしは「野菜畑」に行っていたらしい。、やがて、たかし、保育室にもどってきて、**「来て！　来て！　とにかく来て！**」とTを「野菜畑」につれていく。

たかし、「このきゅうりはもう大きくなった」「これはまだ」

たかし、次々にきゅうりの実の大きさを確かめていき、「はさみでとっていい？」とTにきく。

Tがきくと、おばあちゃんの家で野菜の収穫の経験をさせてもらっているようだ。

T、たかしに、「みんなにも聞いてみよう」とその場で収穫するのを待たせる。

みんなで集合した場で、きゅうりが大きくなっていることを話し、明日、ほし組（もう一方の年長組）と一緒にに収穫しようという話になる。

たかし「５個くらいなら、ほし組・つき組といちご組とさくら組とたんぽぽ組にあげたい。」と言っている。

6月17日（土）

子ども達が皆登園した頃をみはからって、声をかけていき、希望の子ども達数人できゅうりの実を収穫。

たかし、他の子どもたちに「これはいい」「これはまだ」等、自分なりに収穫していい大きさかどうかを判断しながら伝えていく。

T「たかちゃんて、きゅうり博士だね」
たかし「おばあちゃんに教えてもらった」

年長組担任２人は、前日収穫できそうなものは２～３本と思い、年長組２クラスで一切れずつでも食べようと話し合っていた。しかし、実際に子ども達が収穫したきゅうりは、５本あった。

たかし「５本あるから、いろんな組の人にあげたい」と強い願いを表す。
T「そうだね。みんなに相談してそうしたいね」

子ども達、５本のきゅうりを収穫すると、今度はそれを園内の全員のTに見せにまわる。

年長組２クラスで集合し、今日収穫したきゅうりをみんなで見る。

T、たかしが「５本あるからいろんな組の人にあげたい」と願っていることを知らせ、みんなにどう思うか聞いてみる。

少しの本数なので自分たちで食べたいという気持ちをもつ子も当然いると思われたので、少し間をもってきくが、特に反対の意見は出ない。

まだ特にそういうことを考えていなかったという子も多かったと思われる雰囲気であったが、みんなの了解を得て、実際に年中組・年少組の各学級に１本ずつ持っていこうということになると、**「ぼく、さくら組に持っていく。」「わたし、たんぽぽ」「いちごさんに持っていく」**と大騒ぎになる。

結局、１本のきゅうりを先頭に10数人ずつの年長児が、年中・年少組の３クラスに出かけていった。

その後、残った２本のきゅうりを、Tがみんなの前で人数分（65人）に切り分ける。子ども達全員真剣な表情で静かに、切り分けるTの手元を見ている。取れ立てのきゅうりのせいか、子ども達、「おいしい！」と言いながら食べる。

3、きゅうりの実を仲立ちに、いろいろな思いが出てくる

6月19日（月）

大学より教育実習生が来園。つき組では５人の実習生がこの日から６月23日（金）まで実習。

6月20日（火）

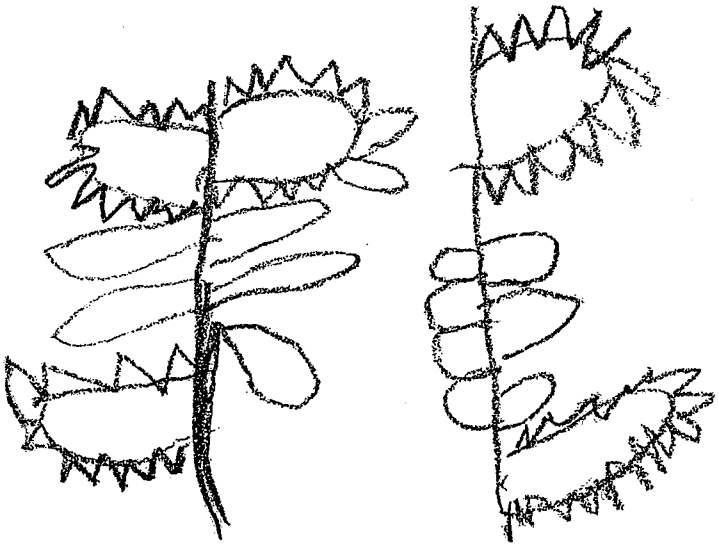
たかゆき、「野菜畑」できゅうりの様子を見て、「５本ある」と言う。

つき組は、翌日の誕生会の会場準備の担当になっていた。

T、最近の子どもたちの活動から、『大事に育てているものの絵をかいて、誕生会の時みんなにみてもらおう』と提案。

子ども達、それぞれに今自分の気持ちが向いているもの――年長組になってから飼育をまかされているニワトリ、家庭から持ち込んで保育室で飼育している虫、今生長しつつあるきゅうり・ミニトマト・とうもろこし・アサガオ・フーセンカズラ・コスモスなどの絵をかく。

ひでき・たかし、きゅうりの感触をとげとげの線でえがく。



「きゅうり」
（ひでき）

6月22日（木）

次々にきゅうりの実が実ってきて、10本近くが大きくなり、気にかけてみている子もいる。

もう一方の年長組のほし組の**そうたの「ぼくたちもきゅうりを切りたい」**という願いをもとに、明日年長組全員で実ったきゅうりを収穫してサラダをつくろうと提案する。

子どもたち、喜んで心待ちにしている様子。

あいこ「きゅうりのお料理を（家で）調べてくる」とはりきって言う。

6月23日（金）

数日前からトウモロコシに害虫がついていて、Tが気がつく限り退治していたが充分ではなくこの日の朝、１本のトウモロコシが根元の茎から倒れていた。

一番に登園して遊びに園庭にとび出していったこういち・こうた、野菜畑でトウモロコシが倒れているのをみつける。

こういち・こうた「たいへんだ！　とうもろこしがたおれている！」と、保育室にいたTに知らせにくる。T、子ども達と一緒に「野菜畑」に駆けつけ、周囲の子どもと一

緒に害虫がトウモロコシの茎を食べているのを見る。

全員が登園したのを確かめた後、年長組の子ども達に声をかけて希望の子ども達できゅうりを収穫する。収穫したい子ができるだけ実際に自分の手で採れるよう、やや小ぶりの実も「とっていいよ」と声をかけていく。

たかし「せんせいたち（教育実習生５人）にもあげたい。たくさんとれたし、きょうでお別れだし。」

収穫したきゅうりをかごに入れて、この日は、ほし組の子ども達が、全員の教職員や子ども達に見せようと、園内をまわっていく。Ｔも一緒についていき、子ども達の見せたい気持ちを支えていく。

学級全員で集合し、教育実習生にも見守ってもらいながら、みんなできゅうりを刻み、『サラダ』にする。ほし組と相談し、年中組・年少組にもできた『サラダ』の一部をおすそ分けに行く。

子ども達が『サラダ』を持っていくと、小早川Ｔ（年少組担任）「わー！　おいしそう。いちごさん（年少組）よかったねえ。」等、他学級の担任が応じてくれる。

事務室にもきゅうりを見せにきた子ども達

4、赤くなってきたトマトをどうしようか、考えを出し合う

6月26日（月）

えみ、園庭からもどってきて「トマトが少し赤くなってきた」と、保育室のＴに言う。

Ｔ、周囲の子どもたちと一緒に見に行く。

かな、トマトの木をあちこち見ていき、「こっちも」と赤くなったトマトをみつける。

6月29日（木）

学級で集合している場で、野菜畑のミニトマトがいくつか赤く色づいていることを話題にする。

ゆうと「うすい赤のところがあった。まだ緑のもあった。」

しゅんじ「ちょっと赤のところがあった。」

あいこ「いちごさん（年少組）にあげたい」

さやか・ひとみ「さくらさん（年中組）にもあげたい」

こういち「5個になったら5つの組の人にあげたい」

T「うん、そうだね」と認めながら、「でも、いちごさん（年少組）とかさくらさん・たんぽぽさん（年中組）の所に、ミニトマトを1こもっていったらどうなるかな？」と問いかける。

こういち及び数人の子どもたち、すぐに「けんかになる」と答える。

ゆうと「赤くなるのを待っといて、みんなの数になるまでふやす。」と熱心なようすで提案する。

ゆうとに対して、たかし「赤くなったのをとらないと、落ちる。」と反論。互いに言い合う。

T、しばらく子ども達の気持ちを言い合わせるが、結局両方の気持ちをくんで、「赤くなったのとって、冷蔵庫に入れて置いて、みんなの数になるまで待とう」と提案する。

賛成する子が多かったが、次のような懸念の声もあった。

ゆうや「ずっと入れとくと、こおっちゃう」

あんり「冷蔵庫もずっと入れとくと、くさる。」

かずこ、「トマトが古くなる」

T、それらの意見も聞きながらも、ゆうとの『みんなの数までふやす』という願いを大切にしたいと思い、「やってみよう」とみんなに投げかける。

この後、みんなで「野菜畑」に行き、赤いミニトマトをさがし、収穫した。みんなで数え16個であることを確かめる。

6月30日（金）

あんり、Tに「トマトが赤くなっていた」と知らせる。

T、一緒に「野菜畑」に行く。あんり、ほんのうすく色づいたミニトマトをみつけていて、Tに見せる。

その後、いっしょにきゅうりの方も見る。茎の低いところに実っているきゅうりが長くなり、地面についている。

あんな「とってあげなくちゃ」　　T「うん、とって。」

近くで様子を見ていたらしいちえもやってきて、一緒にほかに大きくなったきゅうりの実はないかさがしていく。

年中児のかずとし（あんりの友だち）がやってきて、**「ぼくたちにもわけて」**と言う。

きゅうりを収穫したあんりとちえ、7本のきゅうりを入れたかごをもって、各学級に見せにいく。

野津T（年中組たんぽぽ組担任）、子どもたちが見せにきたきゅうりを手にとって、「うーん、いいにおい」と取れたてのきゅうりのかおりをかいでみせる。

近くにいたあきの（たんぽぽ組）もにおいをかいでみる。
石橋T（年中組さくら組担任)、きゅうりにさわって「イガイガだね」と感触を表現。
近くにいたなな（さくら組）も手を伸ばしてきゅうりをさわってみる。
こうすけ（つき組)「また、とれた？」
あんな「うん、７本」

この日も、きゅうりを年中組・年少組にも１本ずつ分けて、年長組２クラスは２本ずつを切り分けて食べる。
その後の遊びの時、こうじ（つき組）・ゆうき（ほし組)、Tに「たくさん食べたい」と食べるきゅうりの量が少なかったことを言う。
T「きゅうりの小さいのができているから、またね。」

5、七夕サラダパーティ　等

7月3日（月）

ほし組のはるか・まみ・しんじ、「野菜畑」でトマトときゅうりを収穫する。
その後、ほし組はるか・しずから、「七夕サラダパーティ」をしたいという願いのもと、「ポスター」をつくり出す。
ちえ「ほしさんが七夕サラダパーティをするんだって」とTに言う。
あんりは、ほし組のはるかたちと一緒に『ポスター』を作って、さくら組といちご組に届ける。

つき組で集合した場で、あんりがポスターを届けたことを話題にし、ほし組のはるかやしずかが「七夕サラダパーティ」をしようとしていることを知らせる。
しの「何か手伝わないと。(はるかやしずかだけでは）たいへん。かわいそう。」
こういち「お皿を出すこととか。」
ゆうや「材料を並べる（手伝いをする)」
あんり「しずかちゃんたちは、こう考えてたよ。トマトときゅうりがたくさんならないとできないって。」
こういち「とうもろこしも（いる)。(野菜が）いっぱいないといけない」

ほし組の子どもたちは、７月７日の七夕の日に、全学級でこの「七夕サラダパーティ」を開きたいと考えていたが、すでに年中組ではこの日園外の人を招いての他の活動を計画していた。そこで年長組担任で話し合い、子どもたちに、七夕の日には保護者の方を招いて「七夕サラダパーティ」をしようと提案する。

7月4日（火）

たかし「トマト、おちてた。」と1個のトマトをTに見せる。

1個ずつを大切に思う気持が感じられる。

T「赤くなっているの、落ちる前にみてとろうか？」

たかし「これはいい」「これはやわらかい」等言いながらトマトをとっていく。

また、近くのとうもろこしを見て「（とうもろこしの）ひげがかたくなったら、（中の実が）できてるんだよ」と言う。それらのことは、おばあさんに教えてもらったとのこと。

学級のみんなで集合した際、今日のトマトの収穫を見る。

かなりの量であり、だんだん増えてきた量感を感じて、「サラダパーティ」ができそうだということを感じさせたかった。

7月7日（金）

ゆうと「赤いトマト2個発見！」とその2個をもいで走って帰ってくる。

みんなで今までに収穫したきゅうりとトマトを切って「サラダ」をつくり、降園前に保護者の人と一緒に「七夕サラダパーティ」をする。

「七夕サラダパーティー」

7月15日（土）

年長組できゅうり・トマトを切ったり、とうもろこしを混ぜたりして「サラダ」を作る。

誕生会（全学級）の最後に、年長組からのプレゼントとして年中組・年少組に「サラダ」の皿を渡し、各学級で誕生会のおやつとともに取り分けて食べてもらう。

（年長組の担任としては、誕生会で全学級が集まった場で、年中組・年少組と一緒に、年長組の作った「サラダ」を食べる場を持ちたいという願いはあったが、誕生会の活動内容とのかねあいで、各学級に持ち帰ってもらう）

7月19日（水）

夏休みまでこの日を含めてあと２日となった。トマトがかなり実っている。

学級で集合した場で、T「まだトマトをとったことのない人、とってみない？」と誘いかける。

ゆうと、たかしに「これ、いい？」と聞きながら、トマトをもいでいく。

たかし「これいい。これもいい。あった。」と次々にトマトをもいでいく。

しんいちも「たかしくん、これいいの？」と聞きながらとまとをもぐ。

T、ゆうとに「トマト、いっぱいになったけれど（数えて６５個あった）、どうしたい？」ときく。

ゆうと「たんぽぽさんとかにあげたい。いちごさんにも、さくらさんにも」

T「もう少し数が足りないから、あさって（翌日は休日、明後日の終業式の日）にしようか」

近くで、しゅんじ「食べたい、100個食べたい！」といっている。

7月21日（金）　終業式

年長組担任で話し合い、また他の学級の担任とも相談し、終業式で全学級が集まった際、終業式の最後にみんなで、顔を見合わせながら、それまでに収穫のあったトマトを食べる場をもつ。

Ⅱ　「野菜にかかわる生活」の実践をふりかえって

１、たかしの願いを支えたことについて

６月16日（金）、たかしは「野菜畑」に行き、大きくなったきゅうりの実をみつけると、「来て！　来て！　とにかく来て！」と保育者を呼ぶ。そして、明日ほし組と一緒に収穫しようということになると、**「５個くらいなら、ほし組・つき組といちご組とさくら組とたんぽぽ組にあげたい」**という願いを表わす。翌６月17日（土）、実際に５本のきゅうりの実を収穫することができると、たかしは**「５本あるから、いろんな組の人にあげたい」**と、昨日来の気持が変わっていないことを表わす。

保育者は、実った野菜をどのようにするかを子どもたちと共に考えていこうと思っていたが、まだ収穫できそうなものも少ないこの時点で、他の学年(年中組・年少組)に分けるということは考えてもいなかった。しかし、２つの理由から、たかしの願いをみんなに知らせ、了解を得る形で支えていった。

ひとつの理由は、４月の進級以来のたかしが、学級の中で自分を十分に出して遊んでいるように思えないということであった。特に不安定という様子でもないが、保育者にこのように積極的に自分の思いを表わしてくるということも、この時点までなかったように思う。そこで、せっかく自分の願いを強く表わしてきたこの「機」を捉え、それを

支えていくことで、より自信をもって生活してほしいと考えたからである。

もうひとつの理由は、この願いが「幼稚園の全学級（５学級）にあげたい」という年長児らしい内容であることであった。

つき組の子どもたちは、11期（４月・５月)、年長組になったことを喜び、はりきった気持で遊んでいく様子がみられた。しかし、再編成された学級であることもあって、子どもたちは昨年の年中組の時のなかよしの友だちをよりどころとしている傾向も強かった。12期（６月・７月)、より年長児としての気持をもって、年中・年少児に対応してほしいと願っていたところであった。

このような理由で、ひとりの子どもの願いをみんなに了解をとる形で実現していったのだが、この６月17日に実際に年中・年少組の各保育室にきゅうりを届けることになると、「ぼく、さくら組に持っていく」「わたし、たんぽぽ」「いちごさんに持っていく」と大騒ぎになるほどで、他の子どもたちもその願いに気持を動かされたようであった。

２、たかしの願いに触発された子どもたち

６月29日（木)、ミニトマトがいくつか赤く色づいていることを学級の話題にした。

すると、あいこ「いちごさん（年少組）にあげたい」、さやか・ひとみ「さくらさん（年中組）にもあげたい」、こういち「５個になったら５つの組の人にあげたい」と言うなど、６月17日のたかしの願いに触発されたと思われる意見が出てきた。

さらにこの日には、ミニトマト１個ずつでは各学級で「けんかになる」と感じた子どもたちが、今度はどうしようか考えを出し合っている。

ゆうとは、それまでは話を聞いていたが、**「赤くなるのを待っといて、みんなの数になるまでふやす」**と熱心な様子で言い出す。このゆうとの意見に対して、たかしは**「赤くなったのをとらないと、落ちる」**と反論。互いに言い合う場面になる。

保育者は、２人とも自分の思いをしっかりと表していると、その言い合いを価値のあるものと受けとめ、しばらくきいていくが、結局両方の気持ちをくんで「赤くなったのをとって、冷蔵庫に入れておいて、みんなの数になるまで待とう」と提案している。

この後、ゆうとは、７月７日（金）七夕サラダパーティをしようとしていた朝も、少しでも増やそうと、登園後すぐ「野菜畑」に行って「赤いトマト２個発見」と、その２個をもいで走って保育室にもどってくるなど、自分の願いを持ち続けていたようだ。

３、その後の生活の様子と重ねて

１，２のように、**子どもたちのさまざまな欲求や思いを受けとめながら、期にふさわしい願いやめあてを価値付けたり支えたりすることで、子どもたちは、自分の願いやめあてをもち、より追求的に活動しようとしたり友だちと考えを出し合ったりしていこう**

とするだろうと考え、その後の保育に努めてきた。

ところで、振り返ってみると、この12期の「野菜にかかわる生活」の中では、結果的には、ひとりやそれぞれの子どもの願いを支えることをしていたように思う。それがこの期にふさわしかったかどうか検討の余地があると思うが、これ以降の期の生活の中では次のような姿がみられた。

＊14期の生活の中で…「おみこしを作りたい」と、**友だちと願い・めあてを共有**して、どのように作るかなどを相談して活動する。

＊14期の生活の中で…「つき組サーカス」を、**自分たちで**12月12日にしたいという**願い・めあてをもって「練習」をする**という意識をもつ。また、自分たちで他の学級の友達を呼び集める。

＊15期の生活の中で…「つき組の森」というイメージを、**みんなで話し合う中で発想し**、自分たちの遊びの場を「森のようにしたい」という願いをもって活動する。

Ⅲ　今後の課題

1、子どもが願いをもつことにかかわる要因やその過程をより理解していき、環境の構成に生かしていきたい。

（この実践の中のたかしの場合、野菜にかかわっては祖母との家庭での経験、及び昨年の年長組に焼きいもパーティをしてもらった事、ニワトリ当番について教えてもらったこと、等の経験から、今度は自分があげるほうになりたい・なれるという喜びなどがかかわっているものと思われる。）

2、子どもは本来さまざまな欲求・思い・願いをもち、心ゆくまで遊んでいく存在だと思う。それを自由に表わせる雰囲気や人とのかかわりであったかについて、さらに研修していきたい。